



No. 153

ティークレイク

Tea Break

ピーターパンの親なれば

会員 正林 真之

小学三年生の国語の教科書の中に出てくる「ちいちゃんの影おくり」。戦時下の話である。

小学校には「朗読」という宿題があり、親に聞いてもらわねばならない。ただ、朗読はその話の一部に対して行われるものであり、全ストーリーは分からない。自分が小学生の頃にはなかったものだったので、その全文を読んできた。

「影おくり」というのは要は残像効果を利用した一種の遊びであり、よく晴れた日に自分の影を10秒くらい凝視した後、その状態で青空に目を向けると、青空にその影の残像が映る。この現象が、あたかも自分の影を青空に送ったかのように見えるので、「影おくり」と言うようである。

話の中では、まず、ちいちゃんの家族は、両親と兄と自分の4人家族。この一家は、父親が出征をする前日のよく晴れた日に、家族みんなでこの影おくりをする。青空には、四人分の影がくっきりと浮かび上がる。

時はすでに戦争の末期で、病弱な父親までもが戦地に駆り出される始末。そうして、その影おくりをする間に、「しっかりと見て!」「瞬きしちゃ駄目よ」と母親が言っているあたりから、結末が予測される。「グリーングリーン」の歌ではないが、父も、母も、この瞬間が四人でいられる最後の瞬間だと、そう思っているのであろう。

しかし、話は別に展開する。残った一家は空襲に会い、逃避のさなかにちいちゃんは、母や兄とはぐれてしまう。重傷を負った兄を母親が背負っていたことから、逃避行動に差異が生じてしまったからである。

こうして一人きりになってしまったちいちゃんは、自宅跡に帰る。むろん、自宅は焼けてしまっていて、家は無い。近所の人々が声をかけても、「お母さんとお兄

ちゃん来るから」と言って、ちいちゃんはその場に残る。そうして、小さな女の子が防空壕の中で、そこに残った僅かな食料で食いつなぐ日々が始まる。

そうして、ある夏の朝、熱っぽい体で外に出てみると、そこには驚くくらいに青い空が広がっている。ちいちゃんは、ふと思立って、影おくりを試みる。すると、そこにはくっきりと、自分の影が映し出される。

ところが、しばらく見ていると、その影は四つになる。父親出征の前日に見た四人家族の影おくりである。気がつくとは自分は青空の中に居て、向こう側からは、父の、母の、兄の声が聞こえる。「なあんだ、みんな。こんなところに居たから、会えなかったのね」。ちいちゃんは、そんな感じのことを言う。自分自身は、お腹がすぎ過ぎて軽くなったから、空に昇れたのだと、そんなふうに思っている。

こうして、ある夏の朝に、小さな女の子の命が空に消えたのだ。けれども、そこは今は公園となって、ちいちゃんくらいの小さな子供たちが楽しそうに遊んでいる。こんな話である。

むろん、あくまで“教材”であるから、ここから読み取れる事実認識の正確さと、感情分析、文章の構成の仕方について、いくつかの設問が続くことになる。ただ自分は、「そうは言っても、なにも家族全員、しかも小さな女の子まで殺すことはなかり」と、そう思った。しかも、「夏の日」であるので、おそらくは終戦間近である。

けれども、当の息子に聞いてみると、「家族全員が一緒になれたから、よかったね」という感想が返ってきた。一応確認のために聞いてみると、ちいちゃんは死んでしまったのだということは、きちんとわかっていた。

一人でも生き残って、しっかりと生きるべきだと、そ

う思っている自分と正反対の感想であるがゆえに、その心を問うてみると、「だって、一人になったら、寂しいじゃん。僕だったら、死んだって家族と一緒にいたいよ」。そして、「ねえ」と視線を送る先には、2才上の姉がいる。

この娘も、同じ教材で学んだので、話の内容は知っていた。すると、その当時もそうだったが、今の今も、弟と同じ感想を持っているようだ。そう、当家は、ちいちゃんの家と同じ、四人家族。完全に他人事とは思えず、「もし自分たちもそうだったら」という気持ちで読んでいたようだから、かなり核心に近い考え方のだろう。

そういえば、自分も小さな頃には、そう思っていたのかもしれない。「家族が離れ離れになるくらいなら、・・・」と。

けれども、いつからそれが変わってしまったのだろう。今では、親兄弟と離れて暮らすのが、ふつうである。

親は死んでも子は残るとというのが、当たり前となっている。いつが転換点だったのか、思い出そうと思っても、思い出せない。

むしろ子供たちには、自立することに大切さ、そして、周りに流されずに自分の生き方をしていくことの重要性については、常に説いているつもりである。親の後を追うなんて、とんでもない。けれども、だからと言って、彼らの発言に対して怒る気にはなれない。

むしろ、自立心を強く説きながらも、そしてその教育こそが真に彼らのためになるのだと分かってはいるが、それが「その日」を招来させるためのものだというのも分かるがゆえに、誠に勝手な話ではあるが、もしできるなら「その日」はもっと後になってほしい。そして、「その日」が来てこの子らの考えが変わるまでは本当に子どものままであってほしい。そうあってほしいのだと、つくづくそう思ったのである。



ヒット商品は こうして 生まれました!

平成25年
改訂版

ヒット商品を支えた知的財産権

「パテント・アトニー誌」で毎号連載しております、「ヒット商品を支えた知的財産権」。

こちらの記事を一冊にまとめた「ヒット商品はこうして生まれました!」の平成25年度改訂版が完成いたしました。

従来手帳サイズだった本誌をA5サイズにリニューアルし、より見やすさをアップ!
是非ご覧いただき、知的財産、更には弁理士への理解を深めていただければ幸いです。

◆本誌をご希望の方は、panf@jpaa.or.jp までご一報ください。

